

< 小学校授業計画事例 >

1 単元名 明治維新をつくり上げた人々（新しい国をつくる）

2 単元の目標

- 江戸時代と大きく変わった社会の変化の中で，人々がどのように感じ，どのように生きてきたか，興味・関心を深めようとする。 （関心・意欲・態度）
- 様々な改革によって変化した社会で生きてきた人々の思いを自分の思いと重ね合わせながら考えることができる。 （思考・判断）
- 様々な資料を活用しながら，明治時代の社会のしくみや時代背景・人々の様子を調べることができる。 （技能・表現）
- 明治政府が，廃藩置県や身分制度などの諸改革を行い，欧米の文化を取り入れながら近代化を進めていったこと，解放令をより所にした差別をなくそうという動きが始まっていったことを理解する。 （知識・理解）

3 単元計画（7時間）

主 な 学 習 活 動	配時
1 新しい世の中が開かれる ○ ペリー来航により200年にわたる鎖国が終わりを告げ，文明開化によって新しい時代が始まっていくことを調べる。	1
2 明治維新 ○ 明治時代になって行われた様々な改革について知り，政府の意図と人々の新しい時代にかける思いを考える。	1
3 富国強兵 ○ 明治政府の基本方針の一つであった富国強兵が，欧米に対抗するため，近代国家をめざした結果，過酷労働条件を生み，人々を苦しい立場に立たせたことについて考える。	1
4 身分制度をなくす ○ 平民となったその外の身分の人々は「解放令」を喜びで迎え，人々が差別撤廃のために思いをふくらませたことについて話し合う。 （本時①） ○ 筑前竹槍一揆の概要を知るとともに，一揆に参加した人々の行動を通して，民衆の差別意識の厳しさを考える。 （本時②） ○ 学校にかける願いを読み，焼き討ちの後，学校建設に立ち上がったその外の身分の人々の姿を通して，平民化への強い願いや行動について話し合う。 （本時③）	3
5 自由民権運動と国会 ○ 日本最初の民主主義運動である自由民権運動を理解するとともに被差別部落の人々に影響を与えたことについて考える。	1

#### 4 本時の主眼及び展開

##### 本時①の主眼

- 差別を受けたその外の身分の人々にとって、解放令は喜びで迎えられ、大きな支えであったことについて話し合う。

##### 本時①の展開資料 A

配時	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援
1 0	<p>1 明治維新の諸政策を振り返り、身分制度をなくす政策(身分制度を改める政策と解放令)について学習することを学ぶ。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"><b>身分制度をなくす政策は、人々にとってどんな役割を果たしたかを考えよう。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 明治時代になって期待することを振り返らせる。</li> </ul>
2 5	<p>2 身分制度をなくす政策について学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 職業、服装、住む場所を自由に選べるようになったことを知る。</li> <li>・ 皇族（天皇一族）</li> <li>・ 華族（公家・大名）</li> <li>・ 士族（武士）</li> <li>・ 平民（町人・百姓・その外の身分の人々）</li> <li>○ 資料 A から、その外の身分の人々の思いを考える。</li> <li>○ 資料 B から、人々が解放されてやりたかったことを考える。</li> </ul> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">素朴な人間としての願いに対して「死刑という極刑が下された歴史的事実が身分制度のきびしさ・重みである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ カクウチ酒を飲みたい</li> <li>・ 祭りに行きたい</li> <li>・ 仕事帰りに銭湯に行きたい</li> <li>・ 散髪屋に行きたい</li> </ul> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">「解放令」によって自分たちの生活を振り返り、差別をなくしていこうと行動することができるようになった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身分制度をなくす政策が人々の願いに叶った政策であったかを考えさせる。</li> <li>○ 解放令が出たことで今までの悔しかった思い、つらかった思いを想起しながら、これからの生活への期待を高めた人々の思いを考えさせる。</li> <li>○ 人々が望んでいたことは、日常生活の中でささいなことであったことに気づかせ、今まで人々が人間として当たり前に行っていたはずのことが許されていなかったことを知らせる。</li> <li>○ ささいなことでもやりたいと言えなかった時代を乗り越え、やりたいと口に出せるようになったことを確認させる。</li> </ul>
1 0	<p>3 解放令以後、その外の身分の人々に対する差別はなくなったのか考え、本時学習の感想を書く。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <b>①完全になくなった</b>  <b>②少しだけなくなった</b>  <b>③なくならなかった</b> </p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 解放令が出たことで、平等な時代を求めて時代が動き出したことを子どもたちが自分の言葉で書きつづれるようにする。</li> <li>○ 時代がどう変化したかを予想させる。</li> </ul>



## 本時②の主眼

- 筑前竹槍一揆の概要を知るとともに、一揆に参加した人々の行動を通して、民衆の部落差別の厳しさを考える。

## 本時②の展開

配時	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援
1 0	<p>1 資料Cの碑文を読み、一揆の犠牲者の思いを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・父や兄が殺されたのはなぜだろう</li> <li>・碑文の悔しい思いとは何だろう</li> </ul> <p>○資料Dから、筑前竹槍一揆について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 資料Cを範読する。</li> <li>○ 身近な福岡県でおこった一揆ということをもまえ、農民の生活状況を考えさせる。</li> </ul>
<p><b>明治維新のさまざまな改革は人々の生活にどんな影響を及ぼしたか考えよう。</b></p>		
1 0	<p>2 資料Eから筑前竹槍一揆をおこした農民たちの要求を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年貢は3年間なくす事 →地租改正</li> <li>・黒田県とし、前藩主を知事とすること →廃藩置県</li> <li>・学制と徴兵令と地券発行を取りやめること →学制・徴兵令・地租改正</li> <li>・藩札を前の通り使えるようにすること</li> <li>・太陽暦をやめ、もとの太陰暦に戻すこと</li> </ul> <p>○その外の身分の人々の生活を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 明治政府が行った様々な諸政策に戸惑いや不満を持ち、生活を困窮化させていったことを理解させ、封建制度の復帰を願った人々の思いを考えさせる。</li> <li>○ その外の身分の人々も苦しい立場にあったけれど、解放令が出たことで解放に向けて闘った思いを考えさせる。</li> </ul>
1 5	<p>3 農民の出した最後の要求を知り、一揆に参加するかどうか考え、思いを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加すれば解放令を否定</li> <li>・参加しなければむらを焼き討ち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 決断した思いを出し合わせることによって、一揆をどんな思いで迎えたかを考えさせる。</li> </ul>
1 0	<p>4 資料Fを読み、筑前竹槍一揆の被害状況を知り、感想をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・明治になってできたものばかりが破壊されていった</li> <li>・一揆に参加しなかったむらは、焼き払われた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ その外の身分の人々は解放令後も厳しい状況におかれていたことを考えさせる。</li> <li>○ 焼き払われたむらの人々はその後どうしたかを考えさせる。</li> </ul>
<p><b>福岡県だけでなく、全国各地で明治政府の諸改革に反対する一揆が行われ、要求項目には人々の差別意識が根強く残っていた。</b></p>		

### 資料C 犠牲者の碑文

明治6年、私の屋敷はばく然とした焼野原となり、父と兄は凶徒の刃で亡くなった。この無念さをよく言葉で言い表せず、天に叫び、地に泣き伏して哀泣の声をあげ、悲しみ続けて、ついに血を吐くに至った。しかし当時私たちは年が若く、なすすべもなく、ただ役人の手を空しく待つばかりであった。ようやく凶徒を罰したとはいえ、亡くなった者の心に、十分報いることができたとは思わない。今ここに大正11年となり50回忌を迎える。墓にきたって過ぎ去った昔の事件を思うと、死んでいった者への悲しみをどこにおいてよいかわからない。流れる涙を墨汁にかえて、七律一首を詠み、霊前に捧げよう。

昔のことははるかに遠ざかり、屋敷の跡も荒れ果てた  
振り返れば50年がたっている  
恨みはふるい出来事とともによみがえって絶えることはない  
愁いは浮き雲とともにいよいよ長く留まっている  
線香の煙は数本の糸筋となって立ち昇り寂しさに添える  
一對の斑鳩の悲しむ声が果てしない蒼空をつらぬく  
ため息をついて涙をのみ、私はただ空しくたたずむばかり  
寒さの中で墓碑銘を読み終えると、夕陽はもう沈もうとしている

### 資料D 筑前竹槍一揆の背景

この年の筑前地方は3月下旬から雨が降らず、6月に入っても田植えができず、わずかに植えた苗もことごとく枯れてしまい、農民の苦悩はその極に達していました。筑前全域で雨乞いが行われ、庄内町の日吉神社でも付近の村々の農民が集まって雨乞いの祈禱が行われました。ところがそのころ、この神社のすぐ後ろの金国山の山頂で、昼は紅白の旗を揚げ、夜はのろし火を焚く者がいました。これは米相場に関係ある者たちが上方の米の値段を知らせるために、数カ所の山頂に目取りといわれる者を配置して、次から次へと通信するしくみでした。1週間昼夜を問わず祈禱は続けられましたが、非情にも雨は一滴も降りませんでした。当時の農民たちは米を作りながらも米が食べられず、米を買うこともありました。この年、米の値段は跳ね上がりました。干ばつに加え米の高値、そして目取りの行動に農民たちの怒りは爆発したのでした。

### 資料E 筑前竹槍一揆 要求項目

- 年貢はむこう3年間なくす事
- 黒田県とし、前藩主を知事とすること
- 学制と徴兵令と地券発行を取りやめること
- 藩札（藩の中で通用する紙へい）を前の通り使えるようにすること
- 太陽暦をやめ、もとの太陰暦に戻すこと
- 

### 資料F 筑前竹槍一揆の被害状況

大挙した数万の民衆はみるみるうちに二手に分かれ、その外の身分の人々の村に向かって突き進み、放火をくわだてました。600戸あまりあった村や200戸あまりあった村に群衆は数千ものたいまつに油をかけ、各家々を回り一斉に放火した。村の家々は一度に燃え上がり、黒煙が立ち上がりました。数千の人々の悲しみわめく声は天にも届き地に響く。そのありさまは、まさにこの世の地獄であり目も当てることができなかった。

### 本時③の主眼

- 焼き討ちの後、学校建設に立ち上がったその外の身分の人々の姿を通して、平民への強い思いや行動について話し合う。

### 本時③の展開

配時	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援
1 0	<p>1 焼き討ちにあった人々は、どんな気持ちであるか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これからどうしていいかわからない</li> <li>・平等な社会なんて夢だった</li> <li>・負けたくない</li> </ul>	<p>○ 前時学習を振り返り、考えさせる。</p>
	<p><b>焼き討ちにあったむらの人々がどんな願いをもって生きていったか考えよう。</b></p>	
2 0	<p>2 資料Gから、焼き討ちで焼かれた学校の再建をめぐって学校にかけの願いを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校再建に対する自分の考えを書く</li> <li>・自分の考えを交流する</li> </ul> <p>○一揆で焼かれた時</p> <p>[建てかえたい]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり学校は必要</li> <li>・学校がなければ子どもたちに差別のおかしさを教えられない</li> <li>・子どもたちのために・・・</li> </ul> <p>[建てかえるのは無理]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・また焼かれるかも・・・</li> <li>・お金や労力がかかる</li> <li>・食べられない</li> <li>・学校を建てている場合じゃない</li> </ul>	<p>○ 差別をなくすためには学校が必要であるという思いと生活していくには学校よりもまず他にしなくてはならないことがあるという思い、また差別をなくすことは無理だという思いなどを書かせる。(資料G-①)</p> <p>○ 学校再建をどうするかを考え自分の意見を交流させる。どちらかに自分の意見をまとめさせるが、心理的な面と物理的な面での思いの違いを出せるようにして、交流させる。(資料G-②)</p>
1 0	<p>3 差別をなくすために必要だったのが学校だった理由を考える。</p> <p>○建て直そうと決めた時</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強しとかな世の中のおかしいこともわからん</li> <li>・こんなに苦しい目にあわない世の中にするためには学校が必要</li> </ul>	<p>○ 建て直した事実を知って、むらの人たちが学校にどんな願いを託したのかをもう一度考えさせる。(資料G-③)</p>
5	<p>4 学校を再建させた人々の思いをまとめ、感想を書く。</p> <p><b>人々は、差別されない新しい世の中への強い願いと希望を持って学校を再建させていった。</b></p>	

## 資料 G

### 学校にかける願い

「できたぞ。」

「中をそうじして、早く使えるようにしよう。」

「よし、次は、よい先生を見つけてこな。」

村の人たちが口々にいいながら取り囲んでいるのは、建てたばかりの学校の校舎です。学校といっても、今のように大きな建物ではありません。教室も二つぐらいの木造の学校です。けれども、学校を見る人の顔は、ほこらしそうです。なぜ、こんなに学校の完成を喜んでいるのでしょうか。

### 資料 G - ①

1872年（明治5年）秋のことでした。

その年の夏、明治政府から「学制（学校をつくって子どもたちに教育を受けさせる制度）」が出されました。しかし、

「子どもも立派な働き手。学校に行っている間、子どもは働けないじゃないか。」

「学校なんか必要ない。紙やら筆やらにお金を出して学校に行かせたら、（草取りをさせる人がいないので）田んぼに草が生えてしまう。」

「学校ばつくるっていても、そげなお金は、うちの村にはなかろうもん。」

そんな声が多く、学校はなかなか広まりません。新しく校舎を建てたところは、ほとんどなく、たいていはそれまでの寺子屋やお寺、倉庫などを学校にしたのでした。

そんな中、新村では「学制」が出されたことを知ると、すぐに学校をつくる相談をはじめたのです。

「去年の『解放令』で、おれたちも平民になった。」

「博多の町に出て行くと、中に入れてくれん店とかあるばってん、これからは『四民平等』の世の中たい。どんどん世の中に出て行って、差別のなくなるようにしていかないかん。」

「そうたい。今までうちの村のもんを差別しよった悪い習慣を変えていかないかん。」

「それには、子どもたちに新しいことを勉強させないかん。学校ばつくって、子どもたちに教育を受けさせよう。」

「それがよか。何とかして、みんなで村に学校ばつくろうやないか。」

こうして村の人たちは、お金や木材や労力を出し合って、1873年10月新村に学校をつくりあげました。さらに福岡県庁に、当時のお金で150円（現在の350万円から500万円）の負担金をそえて、「新村に学校をつくりましたので認めてください。」という届け出を出しました。

こうして新村では、差別されない新しい世の中への希望を持って、学校が始まったのです。

## 資料 G - ②

『解放令』が出た後、その外の人々の中には、これまでの差別するきまりやしきみを見直し、まわりの人たちと同じように生活をしていく動きが出てきました。

しかし、まわりの人たちにとっては、今までの習慣や考え方を急に变えていくことは難しく、またその外の人々が自分たちと同じような生活をしていくことは「がまんできない」ものだったようです。

1873年、明治政府の方針に不満をもっていた村人たちが中心となって、一揆が起こりました。村人たちは、明治政府の改革（税について・徴兵令について・四民平等についてなど）に対することを要求し、福岡県庁をめざしました。とちゅうの村々にも参加をよびかけ、一揆の人数はたちまち数万人にふくれあがりました。

一揆をおこした村人たちが新村にもやってきました。

新村の人たちは悩みに悩んだ末、一揆に参加することを拒否しました。やっとつかんだ「平等」の権利を捨てることはできなかったからです。

「大変だ。一揆はこっちにむかってきようぞ。」

「何で、うちの村が・・・」

「『解放令』が出て平等の時代になったことがどうしていけないんだ・・・」

「おれたちは、何もまちがったことはしていないのに。」

一揆は、新村を焼き払いました。新村にあったおよそ400戸の家は燃え上がり、黒い煙が立ち上りました・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

新村の人たちが協力してつくった学校も焼かれてしまったのです。

## 資料 G - ③

「家も焼かれてしまって、今日からどうやってくらしていけばいいのだろう・・・」

「焼け残ったものもあるけん、食べ物とか何でもみんなでつごうをつけたらなんとかなるくさ。家も建て直そう。」

「うん、どげんかして、みんなの家ば建てて・・・学校も建て直そうや。」

「学校？それどころじゃなかろうもん、うちはもう、お金はだしきらんばい。」

「またみんなが出せる物をだしたらよかろうもん。お金でもいい。働き手でもいい。」

「勉強しとかな、世の中のおかしいこともわからんやろうが。」

「そうたい。こげなめにあわんですむ世の中にするには、やっぱり学校がいる。」

「よし、家の建て直しが終わったら、次は学校の建て直したい！！」

村の大部分が焼き討ちにあった中から、人々は立ち上がりました。

家を建て直し、仕事にせいを出し、次の年にはもう学校も建て直したのです。

**それも、前よりも大きな学校を建て直したのです。**

新村の学校は、子どもたちでいっぱいになりました。それだけではありません。建て直した1年後、福岡県から土地を払い下げてもらい、さらに大きな学校を建てることになったのです。

1875年（明治8年）やっと福岡県にも学校が増え始めた頃のお話です。